

(第1回) 長期的な土地利用の在り方に関する検討会<概要>

令和2年5月20日(水) 14:00~15:50

(安藤委員：東京大学大学院農学生命科学研究科 教授)

- 集落において、農家、非農家に関係なく、一定数以上の戸数の存在により農地保全等の集落活動が維持できるという仮説が正しいのならば、仕事を創り、暮らしを支えるといった居住者を増やすための施策が最終的に農地保全にもつながる。
- 中山間地域は多様性に富んでおり、水田型、田畑型、畑地型等の違いによる集落活動の差の検証により、農地保全に係る施策が見出せる可能性がある。
- 減反政策(1970年代)により植林が進んだ山間部の水田のその後の検証により、どのような植林が有効か等の議論の素材になるのではないかな。
- 地区単位といった大規模で水田を放牧地に転換する場合は、水利施設の取扱いについても検討が必要。

(池邊座長：千葉大学大学院園芸学研究科 教授)

- 地域の農業者しか農地を利用できないこともあると聞く。地域外からの新たな人材の受入れについて議論してきたい。

(笠原委員：新潟県阿賀野市農業委員会 会長職務代理)

- 新たな土地利用(①農地利用、②農地復旧が容易な非農地に転換、③農地復旧が困難な非農地に転換)の区分については、もう少し細分化が必要。
- 農地復旧が容易な非農地に転換した場合であっても、一度非農地になってしまうと、その後はほぼ元に戻らないのではないかな。
- 遊休農地は、中山間地の場合は面的に広がり、平地や都市近郊は点的に発生して広がっていく。広がり方が違うので、地域別に対策が異なる。
- 特に中山間地域では、水利の関係から、上流部の農地の非農地化が下流部の優良農地の荒廃を引き起こす可能性もある。上流部の農地の生産性が低くても、必要な農地として考えることが必要。

(高橋委員：山形県置賜総合支庁 農村計画課長)

- 中山間地域では、平地の人手を借りながら農地の維持を考えることが必要。
- 食料自給率の向上は、作物の中でも手間がかからない作物、食料自給率が上がる作物の導入を考えることが必要。具体的には、耕畜連携を考えることが必要。
- 農地を守るための合意形成は、その対象範囲をよく検討すべき。

(田口委員：徳島大学総合科学部 准教授)

- 土地利用は、農地確保と担い手確保の両面を考えないと機能しない。
- 農業集落の維持は、周辺集落や立地の関係も分析することが必要。
- 特に農山村では、「自分の土地は誰にも渡さない」という人も多く、集積に対する何らかのインセンティブが必要。
- 平地が少ない所では、「農地を宅地化したい」との要望も多い。担い手の受入れの

ためには、「農地に戻すことが善」という議論だけではなく、その地域の担い手確保に寄与する方向へ持っていくことが大切。

- 環境保全か、食料生産向上かにより、農地確保の戦略の方向性も大きく変わる。

（林委員：金沢大学人間社会研究域人間科学系 准教授）

- 担い手については、定住者を前提に考えているが、通勤耕作人口や季節居住についても分析する必要。
- 「再生利用が困難な農地」については、農業土木技術的にできないのか、経済的にできないのか、誰もやらないということなのか。その意味合いをクリアにすべき。
- 食料安定供給は必要だが、将来人口が半分になったら、耕地も半分でよいとの考え方もある。守れそうなところだけを守るような、現状維持を追認するだけのゾーニングは意味が乏しいため、2030年、2050年、2100年までは守るゾーンといった、長期的、段階的、戦略的なゾーニングといった防衛ラインのような議論が必要。

（広田委員：岩手大学 名誉教授）

- 農業政策を考える場合、集落やコミュニティの捉え方が大切。棚田をサポートしている都市住民や、特に中山間地域に見られるように、そこに住んでいないが、地域資源の管理に関わっている者を含め、「拡大コミュニティ」「拡大集落」として捉えるのがよい。
- 守るべき「優良農地」は、生産性、集団性や基盤整備の有無から判断していたが、中山間地域の棚田など、景観や生物多様性に富む農地もこれに位置付けてはどうか。
- 農地の保全に関する合意形成の範囲については、個々の集落よりも、複数集落集まって検討する方が有意義。小学校区、地区単位といった考え方が大切。
- 地域の合意形成は容易ではないため、支援する人材が必要。
- 農地の再生を考えるならば、農道や農業水利施設の存在等も視野に入れるべき。農地に行く道が無ければ、再生も利用もできない。
- 本来、「ゾーニング」とは、開発をさせない規制的手法のことを指す。政策的効果を発揮させるためには、ゾーニングによる土地利用区分とアメとなる誘導的施策の組合せが重要。「禁止」するだけだと、うまくいかない。

（深町委員：京都大学地球環境学堂 准教授）

- 中心経営体に農地を集めることは大事だが、小規模だが頑張る人たちの存在を活かすことができれば、農地を上手に残していける。
- 小規模な農地に多様な主体が関わることも、災害等の非常事態における食料確保の視点では非常に大切。
- 農地の林地への転換は、植林しただけで手入れをしないと、災害が起こりやすく、植林により林地にしてうまくいくことは限定的ではないか。むしろ、自然に林地や湿地になった方が、生態的な価値が高くなるケースすらある。
- 農地は、農地に適したところから開墾してきた歴史がある。農地として残すか否かは、江戸時代からの土地利用履歴に基づきながら考えることも大切。

以 上